

陶晶孫『両姑娘』への一考察

小崎, 太一
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494456>

出版情報：比較社会文化研究. 4, pp. 43-48, 1998-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



陶晶孫『両姑娘』への一考察

小崎 太一

恋愛小説を論じるヤボを、やってみたいと思う。

陶晶孫の創造社時代の作であり、その時期をまとめる作品集『音楽会小曲』^(注一)の、末尾の短編小説『両姑娘』^(注二)（二人の女の子^(注三)）を、私は本論で読み解いてみたい。というのも私はこの論文を、中国の新文学運動の展開に力を与えた創造社、その創立以来のメンバーである陶晶孫の、帰国を目前にしての日本に於ける文学活動の様を知る、一つの試みとして位置付けているからだ。彼の文学は中国への帰国^(注四)を境にロマン主義からプロレタリア文芸へと移行するのだが、この論文から導き出した『両姑娘』の位置付けが、その変化の跡付けの手掛りとなろう。

陶晶孫文学の研究は未だ、全く手付かずの状態であると言え、この彼の文学に現われたロマン主義からプロレタリア文芸への移行という大きな変化も、ただ帰国という彼の人生に於ける事件のみに於て説明がなされて来た。帰国後の上海にて彼の接した故国の現状が、彼を左翼文芸活動に向かわせたのだと。伝記中の事件と文学上の変化とを、皆が安易に重ねてそこに大きな区別をつけている。しかしそれだけで、この極端な移行が論証されたとは言えない、人はそんなにも突然に変化する存在ではなく、そこには何らかの過渡的なものが残されてしかるべきはずである。たとえば本論では取り扱わないが、創造

社の末期に陶晶孫が既に左翼的な作品『勘太与熊治』^(注四)（カントとクマジ）^(注五)を書いている事も、それを明示している。その様な足跡を、私は彼の日本における文芸活動：ロマン主義文芸活動を締めくくる作品集『音楽会小曲』、その末尾の作品『両姑娘』に於て探ってみたい。

本論はその様な、旧来の陶晶孫文学研究のためたいへの、私なりの投じる一石である。^(注六)

「両姑娘」というタイトルであるから、登場する二人の女性の存在から分析せねばなるまい、一人は主人公「晶孫」の婚約者で、東京に生活する中国人女性「麗葉」、そしてもう一人は主人公の昔の知り合いだった、名の一度も記されない日本人の女性である。

主人公は麗葉に会いに東京に来たが、冷たくあしらわれ、その寂しさをまぎらわそうとさまよっていた銀座で、昔手紙を送った事もある日本人の女性と再会し、彼女の一人暮らしの部屋へ。主人公が睡眠薬から目が覚めると、彼女は主人公と麗葉がその家で二人だけで楽しく過ごせる様に手筈をし、自分はどこかへと消え去っていた。麗葉が帰った後に彼女は又現れる、そして主人公に、彼と麗葉が結婚した後でも今のこの関係を持続ける事を求める。

この作品を濱田麻矢氏は、

陶晶孫の小説中の日本の女性のみならずともやさしく、無条件に主人公の中国人留学生の言う事をきいてくれる。^(注七)

と、陶晶孫文学の〈日本への親しみ〉の例としてこの作品と位置付けている。氏の論文は

中国人であるという自覚となく日本に生活して生じた去り難い思い、その両者の間をゆれ動く帰属意識が常に陶晶孫文学の死に至るも変わらなかった基調なのである。^(注八)

と言う様に、陶晶孫文学の持つ国際性に的をしばって論じられているものであるが、この『両姑娘』に於てもその国際性の見地、日本の女性のやさしさが描かれているという氏の見解には当然耳を貸す必要があるだろう。^(注九)私も氏に習い、この作品に於ける二人の女性という存在の、国際性を重視して論じていく。

麗葉の事を考えてみる。

中国人なのであるから、当然彼女は中国という国を背負った存在である。しかし彼女の背負う中国は、他の普通の中国人女性たちが背負っているそれとは多少様相が異なっている。日本で生活しているのだから、彼女の中国は日本の色彩を帯びている、これも又当然であるが、加えて主人公は彼女をこの様に見ている。

彼は江南の女性一人一人が、母親を除いては……みんな嫌いだった。江南に帰省すると、彼の末梢の神経のどの一本でも、必ずみにくさを感じてしまうのだ。そのウルシでぬりたくった様な髪、かかとの無いぞうり、短い上着からかなりはみ出しているその大きなおしり——中国の女性を彼は本当に見たくもなかった。

しかしある時……彼はある浙江の女の子と出会った。

彼女はかかとの高い靴をはき、そしておしりまでスッポリ包み込んでいる長い服を着ていた、そして彼の彼女への思いも他とは違っていた。

濱田氏も、この麗葉の持つ彼女の国際性的特徴に、言及してはいるもののそれだけである。具体的にそれがどんな意味を有するのか、説明がない。

主人公には好きになれなかった当時の中国の女性たち、否、この引用の部分に於ては「中国」は付け足された言葉に過ぎない、それよりも「江南」というべきであろう、彼の母もそうである様に彼の故郷、出身地の「江南」に生まれた女性たちのなかで、彼女だけが主人公の価値観、センスに合う存在なのであった。中国人であるよりも前に、主人公と故郷や伝統を同じくする存在である事の方が重要なのである。それはこの物語の中で、麗葉の事を指す場合には「姑娘」の語が「浙江」、又は「杭州」の語

で限定されている事からも示されている。

では何故主人公の好みに麗葉の存在が叶ったのであるうか。それは二人が、ともにその故郷を離れた異国の地である日本の、特に東京で時を過ごしている事が大きく作用している。

彼が×高等学校にいつてから、一回目に東京に戻った時には汽車は中央駅に止まった、二回目は二車線だった京浜電車が四車線になっていた、三回目は Bobbed hair の女性が銀座の街を歩きまわっていた、四回目に彼は彼女と一緒にフランス料理を食べ、Soda water を吸いに、Restaurant に入った。

二人は当時の東京の、その変化し続ける文化の中で時を過ごしているのである。

故に、麗葉の国際性はつまり、中国——それも彼女と主人公二人の故郷である江南の名門の出だという身体に、Bobbed hair やフランス料理、Soda water に示される東京の新しい文化「モダン」の衣装をまとう事で出現する「国際性」という外観、この二者の共存であると言える。

麗葉の事をさらに、彼女の帯びていた香りから分析してみよう。

この作品に於いて、香りは、女性の存在・性質を象徴する大切なキーワードとなっている。その意味でこの作品は、とても嗅覚的な作品である。

ウェイトレスがたくさんいて彼女たちは皆顔を白や赤に塗っていた。……この女性たちはその化粧水の混じった体臭を彼の鼻孔の奥へと届けていた。

もう十一時だった……彼らが電車に乗ると、電車でさえからで、車中の夜の雰囲気の中で、誰かが降りる前にそこに残した香水の香りが彼の鼻を刺激した。

女性の一般の存在を表す時にはこの様に、その香りの存在だけを作者は物語の中に漂わせているのであるが、麗葉と、後述する日本の女性の場合にはその香りが彼女らの雰囲気、性質、そして彼女たちと主人公の間の関係をも指ししめしている。

彼に度胸がないからだ……彼は彼女の頭に一度口付ける事が出来た、彼女の肌の香りが彼の胸から腹部までを何かの奇妙な感覚で包んだ。

そして彼女は、彼よりももっと活発で、ホームからまた彼を抱きしめ、彼の胸に飛び込み彼と口づけた、彼女の口びるにはまだ幾らかミルクの香りがした。

汽車が動き出した……彼はただ彼の口びるの周りの奇妙な香りをきちんと吸い込んだ、それは、彼の頬の間でちよつと動いただけですぐに生じる香りだった。

一年の間——その二回の休みに、彼は上京し、彼女の口びると化粧水と体温の香りをあじわい帰っていった——

主人公と麗葉の会ってすぐのこの回想の場面で、香りを通して描かれているのは二人の、生じた関係の初々しさ、親密さ、そして麗葉の活発さと、幼なさである。

しかしその様な麗葉の帯びていた香りは、この物語の展開する時間である主人公の「五回目の上京」の際には、何故か消失してしまっている。

まだ三月で、先程彼女と分かれた時に、彼女の口びるはまだ冷え冷えとしていた。

今回の上京に際しての、麗葉の主人公に対する態度はあまりにも冷ややかであった。駅のホームにはむかえに来ずに、その時間にはまだ眠っていた。彼が食事にさそっても、彼女はそれを断った。

二人の関係がこの様に変化をきたしている中で、これは後述する日本の女性との会話の中で浮かび上がってくるのだが、主人公は麗葉との関係に、今一つ満足が得られないでいた。

彼女はある名門の娘で、省長を務めた事もある人の前妻の娘なんだ、とても活発な子で、僕のような田舎ものは本当に彼女にはふさわしくない……彼らはみんな僕の家にも金があると思っているけど、事実は全くの逆さ。

その理由がここに示されている。麗葉と自分が故郷と同じくする事、そしてその故郷の江南・浙江の名門の出である事、それが主人公の心に影を落としているのだ。

二人の関係の進展につれ、麗葉は主人公の前でその東京という外衣を脱ぎ始めている。

彼女の髪がすこし乱れていた。

主人公はそこに、彼の故郷・彼のセンスに合わない女性を見てしまう。彼の忌み嫌う故郷の風土が現れるのである。

この様に考えて来る時、彼らの将来的な結婚というものは、主人公が忌み嫌って来た故郷とふたたび関係をもつ事、言いかえれば彼が自分自身の伝統的・因習的文化

に回帰するという事の、象徴的な出来事であったと言う事が出来る。そして東京という覆いにかくされていたその姿が表面化する時、主人公は直視出来ずに躊躇してしまっている。東京の文化に、彼は愛惜を感じているのだ。つまりここに描かれていた麗葉と主人公の関係は、帰国してから左翼文芸活動に身を投じていた陶晶孫の、その渦中にある際に示していた中国の社会問題への彼の態度、そのものを予見していたものであり、主人公はそこに、正面からぶつかって行く果敢さを持ち得ないでいた。そしてそこにもう一人、新たに日本の女性が物語に登場する。

日本の女性は、主人公の少年時代の知り合いであった。この事を、主人公は彼女との肉体的な接触、そして彼女の香りによつて思い出す。

彼女の耳にかかるまき毛がゆれている、彼女の体のやわらかなはずみが彼の肩にあたつた。

彼はその時になつて思い出した。

まだ中学の頃、彼の通学路に女学生が一人いた。

彼女は太った体で、厚い口びる、ねばつた声で同乗の女の子としゃべっていた、しかし当時の太っているのと今の太っているのでは、感じの上ではかなり違っていた。

彼女は全身からあたたかな香りがする、それは全身の体腺から生じているんだ……。

主人公の感じた触覚、嗅覚的刺激が、彼女を昔の

おばの家で私は、非常に厳しく教育されて、ラブレターもたくさんもらったけど、その一枚一枚をおばに見てもらっていたわ、おばがそのラブレターを

批評してくれたから。

という古い封建的な姿と、今の彼女の在り方を結びつけている。ここではその感覚が、今の彼女の存在の裏付け、その証拠、そして主人公との関係の理由となっている。

この物語の中では、その日本の女性は所謂「モダンガール」、封建的な制約から解放された、大正期日本の流行の先端をゆく存在として描き出されている。二人の再会した場所である銀座、先述した様に変化し続けている東京の中でもそこは特に変化した、文化的な魔力をもった場所であった。そして彼女は一人、快適に家に暮らしている、男友達も何人かいる、

婚約をして、駄目になつちやっただけで、それは私自身で破棄したの、彼が私の好みにあんまり合わなかつたから。

という言葉は、以前の彼女がそうであった封建の土壌からは生まれぬ。

ところで東京とは、主人公にとって成長の場であった。

彼が初めて日本に来た、中学生の時、東京はまだどこも鉄道馬車で、あの頃もし自動車が出来ようものなら、たくさんの人が家から飛び出して来た。もし西洋人が街を通るならば、その後ろには必ず小学生の団がついて走り回っていた。彼が中学生の時には、今や東京の中央駅の前の草地で、盗賊がまだ夜に乗じて女性をさらう殺したりした、その草地の一角に今地面をほり Imperial Theatre が建てられている。

「家はどこ？」

「中野よ。」

中野と聞くと彼はなつかしさがあふれて来た、そこは東京にいた頃よく散歩に出掛けた場所なのだ。「今、中野はどんな風なんだろう？」

日本の女性が主人公の感覚によって、その以前の思い出とつながりを持ち得たという事はつまり、彼女が主人公にとっての東京、少年の頃の思い出から今の、変貌を続ける文化、その全てを体現しており、彼女の出現によって主人公の幼くして日本に渡って来て以来の成長の足跡が、具体的に再確認された事になる。彼女はそんな東京での主人公の成長、そして現在の彼の価値観の象徴であると言える。

その彼女が主人公と麗葉の、仲の修復の機会を提供してくれる。主人公が眠る間に彼女は勝手に麗葉に連絡し、家へと呼び、主人公と二人の時間を提供する。また

「……彼女はきっと僕を捨てる——」

「何で？」

「Coquettish——と言うかあまりにもおてんばだから。」

「でも Coquettish で自分の身を保てる人はたくさんいるわ。」

「あなたは彼女の貞操を信じられるの？」

「出来る——けど『出来る』以上は何もない。」

「何で？」

「彼女は男友達が多過ぎる、彼らは彼女が省長の娘だから、彼女の機嫌を取っている。」

「それなら私は彼女が Kiss の一つさえ彼らに許した事はないと思うわ。」

この様に彼女は、主人公の麗葉に対する疑問を一つ一つ否定し、彼ら二人の仲を保証する存在となっている。そして彼女自身のいるべき場所はどこかというところ、

「彼女が二人いるのもいいと思わない？」

「だけ——」

「私はそばにいたいだけ、あなたが彼女と結婚したいのなら、好きな様に。」

彼女は自らを二人の、影の立場であると認識している。

この作品のなかで、日本の女性は主人公と麗葉の間の恋愛を維持させる、そんな役割をふり当てられているのである。

この事はこの作品のキーワードたる、香りの側面からも導き出せる。

彼女の全身からあたたかい香りが生じていた……それはあの浙江の女の子のとは全然ちがうものだ。

「浙江の女の子」つまり麗葉の香りと、彼女の香りが対比されている事がここで分かるのだが、その日本の女性の香りが、この作品の中で意図的に物語の材料として用いられている箇所がある、主人公と麗葉の為に場所を提供し、自らはいなくなるに際し彼女が残す手紙に記された、次の言葉である。

ピアノが届いた後あなたの彼女はきつと来ます、それからはこの家はよりあなたの部屋みたいになるでしょう。

ここには私の残り香がただよっているけど、分かってるわよね？

あなたの彼女が帰ってから、私は戻ってきます、

だから心配しないで、あなたのおしゃべりの最中にジャマしたりしないから。

ここでその香りは彼女自身の、主人公と麗葉の影であるというその存在を暗示している事になる。二人の仲を回復させるために手配りをし、自らは香りとなって、そこに漂う。

つまり日本の女性の存在は、消えてしまった麗葉の香りの、その欠落を補う役割を果たしているのである。そしてそれは、麗葉の香りの消失が彼女のまもっていた東京の文化の希薄化と同じであった事より、その東京の「モダン」な文化、主人公が成長し続けて来たその東京の文化を、彼女の香りが補うという意味になる。

そしてその様に考えて来る時、この物語はつまり、主人公と麗葉の関係が新しい局面に向けて広がっていくその事だけを、そしてそこに託された作者の中国社会に対する態度を描いていた事が分かって来る。言ってしまうと日本の女性の存在は、まぼろしである。彼女の存在は主人公たち二人の新しい関係を暗示するものなのであり、主人公の成長の再確認であり、そして新しい文化をも象徴している香りで、二人の仲が又修復出来るのである。

その事はこの作品の後半部分が日本の女性の部屋という、言わば一つの舞台のみで展開しており、その場所を定めて動かない事、そしてそこでの場面が Veronal という睡眠薬^(注1)、言わば舞台装置によって仕切られ、そしてそれが

彼は Veronal の作用する前の彼女の顔や姿を思い出そうと懸命な努力を続けていたが、結局全く思い出せなかった。そしてひびく Veronal を用いた事を後悔した、全く何か麻薬をもらったかの様だ。……

彼は服した睡眠薬の作用で、ぼんやりとしているだけだった。

と表現されている様に人に睡眠だけではなく幻想を抱かせ、記憶を薄めさせる役割を果たしている事からも示されている。

この作品の中に於て、日本の女性は結局はまぼろしなのである。

この物語の中のその登場人物の構図は、主人公が自らの成長と、自らの所属している伝統・文化との、折り合いをつけて行きたいという、作者の希望を構成する要素なのである。この物語はただ日本の女性のやさしさを描いたものではなく、もつと微妙な、細かい構成の物語なのである。希望・まぼろしなどの、概念的な存在として日本の女性を取らなければならない、この物語に於ける彼女の重要性は、そうでなければ解明する事が出来ない。加えて日本の女性よりも、私は麗葉の方が重要な登場人物であると考え。彼女の存在の意味する伝統と主人公との関係が、この作品のテーマであると私は考えるから。

私はこの作品が陶晶孫文学を考えるに際して、大きな存在意義を持つと考える。始めに述べた様にこの作品は作者の創造社時代を締めくくり、ロマン主義からプロレタリア文芸への移行の時期の作品である。陶晶孫はこの

作品の中で積極的とは言えないものの、自らの経歴・自らに刻印した「日本」と、自らの背負う伝統・つまり「中国」との折り合いをつける事を模索している。従来の陶晶孫文学研究に於ては、留学中の創造社に於ける創作と、

帰国してからの左翼文芸活動とが簡単に分けられていたきらいがある。しかしそうではないのだ、帰国を目前にして、陶晶孫の文学は「中国」の伝統への問題意識を、

日本にしながら作品中のテーマとして扱っていたのである。帰国して、現実にはせまられてプロレタリア文学への道へ向かった訳ではないのだ。

自らの背負う伝統「中国」への視線を、「日本」に留学している陶晶孫文学はこの作品により示し得たのである。

補記

テキストは『陶晶孫選集』（人民文学出版社1995）を用いた。

注

一 創造社出版部 創造社叢書16 1927
初出は『創造月刊』17 1927であり、作品『音楽会小曲』と同じ号に発表されたのだが、その『編後記』に王独清が「今朝の原稿はひどくもの寂しかった……幸いにも晶孫の作品『音楽会小曲』が以前からここに在り、最近彼の小説集の全稿を受け取ってもいたので、私は勝手にその中から一篇を取り出した」と記しており、その「一篇」がこの「両姑娘」である、初出は作者の意図的なものではない。余談になるが、作品『水葬』の末尾（ただし『陶晶孫選集』ではなく初版本『音楽会小曲』所収文）には「二、三、一九二七、記憶の中から旧作を書き出す」としてあるものの、

作品集『音楽会小曲』の最後に置かれたこの作品『両姑娘』で、実質的に陶晶孫のロマン主義文芸の時代は区切られ、まとめられたと言って差し支えあるまい。

三 『陶晶孫選集』所収 陶瀛孫・陶乃煌『陶晶孫小伝』：「一九二八年晶孫は東京での仕事を取りまとめ、婦人弥麗や子どもたちと帰途についた。一九二九年二月のはじめに上海につき、上海で創造社の老友たちに会い上海にいた尾崎秀実を創造社の同人たちに紹介し、そして急いで無錫の実家へと戻った。春節の後に、彼は家をちいさくまとめて、単身上海に向かい東南医学院で教師を任じられ、文芸活動に参加した。以後、彼は無錫と上海の間を往復し、医学と文学芸術活動を押し進めた。」

四 創造月刊 2・1 1928

故に正確に言えば、陶晶孫文学のプロレタリア文学への移

行は、創造社が左傾化して行くのと軌を同じくし、帰国に関わりなく行われていた、さらに逆にその変化故に彼の帰国があったのだとも言える。

六 上海に於て一方で描かれていた、左翼文芸とは一線を画す主人公の中国社会に於てのアイデンティティ獲得を描いた諸作品については、本論では考慮するのを避ける、本論は帰国以前の陶晶孫文学の、帰国してからのプロレタリア文芸との関係を論じている。

七 文学的「混血児」——陶晶孫と日本 中国現代文学研究叢刊 1996.3

八 「注七」に同じ。

九 濱田氏の陶晶孫論には以下の三つの、陶晶孫文学に関して大切な日本文化への視点が欠けている。

① 帰国してすぐの陶晶孫は、日本のプロレタリア文芸の中国への紹介者として活躍した。一九三〇年前後に彼の編集した『大衆文芸』第二期を開けば、それはすぐに分かるはず。飯田良郎『大衆文芸』（大安 161, 162 1969）に詳しい。

② 彼は日本医学の中国への紹介者として、三〇年代半ばに期待されていた。中国を代表する医学学会「中華医学会」の機関誌『中華医学雑誌』、その第二十一～二十二巻（1935～36）に「特約編撰」として名（陶熾孫）が記されている。中国の医学会で重んじられていた様であり、それに応えるかの様に彼は『日本の学校衛生』（中華医学雑誌 21, 12 1935）、『紹介日本井村孝全氏作中国疫癘考』（同 22, 12 1936）を著している。その様な外側の目を持ち得たからこそ『中国新医学受難史序説』（同 22, 11 1936）を書く事が出来、そしてその様な自らの、自国に於ける異邦人としての存在をユーモラスに描いた『陶熾の弁』（自然 1937）が記されたのだ。晩年の日本に於ては変化して、敗戦時に於ける日本の医学を一人の中国人として、文化批判の一環として検証している。

③ 日本は、西洋文化の媒介の地であった。言葉遊びの様に思われるかも知れないが、これは大切な点である。日本留学がなければ、陶晶孫は『ハイン詩集』を抗日戦争のさ中に手にする事はなかった。占領下に於ける文芸的回想も同じ。

十 『化学大辞典』（共立出版 1961）：「バルビタール……バルビツル酸のジエチル誘導体。……催眠薬。……ドイツ Far-bentfabriken Bayer A. G. 製の商品名をバロナール（英 Veronal）とする。一九〇三年 E. Fischer および J. V.

Meringにより催眠性が認められ、今日のバルビツル酸系催眠薬確立の端緒となった。」

『日本国語大辞典』17（小学館1975）には、芥川龍之介『歯車』（1927）の例をあげる。

「……まだ体の具合は悪いの？」

「やつぱり薬ばかり嚙んである。催眠薬だけでも大変だよ。ヴェロナアル、ノイロナアル、トリオナル、ヌマル……」（二）復讐）

僕はベッドの上に転がったまま、「暗夜行路」を読みはじめた。主人公の精神的闘争は、一々僕には痛切だった。僕はこの主人公に比べると、どのくらゐ僕の阿呆だったかを感じ、いつか涙を流してゐた。同時に又涙は僕の氣もちにいつか平和を与へてゐた。が、それも長いことではなかった。僕の右の目はもう一度半透明の歯車を感じ出した。歯車はやはりまはりながら、次第に数を殖やして行つた。僕は頭痛のはじまることを恐れ、枕もとに本を置いたまま、○・八グラムのヴェロナアルを嚙み、兎に角ぐつすりと眠ることにした。（三）夜）

ともに『芥川龍之介全集』15（岩波書店1997）より引用したが、前者の引用には浅野洋氏の『注解』があり、そこに並んだカタカタ名を「いづれも一九五〇年代までの代表的な催眠薬でドイツ製の薬品名」と記している。

作者のねらいは消極的なものであつた。日本の女性が自らの存在を、この物語の中で主張し始めているのだ。

昨日の夜が私の街をぶらつく最後になるわ、今日から行けなくなっちゃった。

私あなたに助けてもらいたいよ。

彼女は主人公に変化を与えてくれるように要求している。考えてみると彼女は主人公と麗葉が過ごす時の為に、彼女の家へピアノを置いてくれている。その事はこの、物語の後半部分の舞台が、主人公の存在がなければ完成していなかった事を示している。

主人公と日本の女性が、相互作用し始めているのである。そしてこの物語の最後の部分、

彼は昨日の夜の Veronal を思い出した。
今日はどうする？

彼は決めかねていた。

「今日は Veronal どうしようか？」

「自由に、けふここに居る間、毎晩は用いないでね——」

ここに示されている様に、Veronal の効果が否定されようとしている。後半部分の幻想性が消え去り、まぼろしだった日本の女性が、自らの存在を主張し始めているのである。